

## 式亭三馬の「ゑ」の表記

——『式亭雑記』の書き込みを糸口に——

長崎靖子

キーワード・『式亭雑記』 達摩屋五一の書き込み うらゑり 『和字正濫鈔』 かまど詞

### 要旨

本稿では、式亭三馬自筆『雑記』（大東急記念文庫所蔵）以下『式亭雑記』に記載された達摩屋五一の書き込みを糸口に、三馬の「ゑ」の表記に関し考察を行った。

『式亭雑記』には五一が「うらゑり」の「ゑ」の表記を「え」に訂正した箇所が見られる。契沖の『和字正濫鈔』には「領 えり 假名未考、俗語坎、物には衣くひといへり」とあり、ひとまずは「えり」と表記しているが、すぐ下に「假名未考」と記されている。現在のところ古い時代の「エリ」の表記は明らかにはなっていない。

本稿では、まず歴史コーパス中納言 (CH) を用い、江戸時代の「エリ」の表記の状況を探った。結果として江戸時代の資料では「ゑり」の表記が大勢を占めるといふ偏りがある

た。が、年代や使用者等による変化ははっきりと確認することができず、江戸時代に「ゑり」の方が優勢であった理由は現在のところ不明である。

次に『式亭雑記』の「エリ」以外の「ゑ」の表記と「え」の表記が見られる語を『和字正濫鈔』の語例と比較した。その結果、『式亭雑記』の「ゑ」と「え」に関しては『和字正濫鈔』の表記と一致していることがわかった。一方、三馬著作の表記では「酔ふ」に対し、「ゑふ」より「よふ」という表音表記の方が多数見られた。さらに三馬の著作には、「ゑ」の表記を片言の表現に利用している例もあった。これらの点から私的文書と著作の表記には異なりがあるため、それぞれの表記が持つ意味を個別に考えていく必要があると結論付けた。

## 一 はじめに

本稿では、式亭三馬自筆『雑記』（大東急記念文庫所蔵 以下『式亭雑記』）に記された達摩屋五一の書き込みを糸口に、三馬自筆の「彙」の表記に関し考察を試みる。『式亭雑記』に記された達摩屋五一の書き込みに関しては、拙稿（二〇一四<sup>1</sup>）の中で報告を行っている。しかし、その中では『式亭雑記』の書き込みと達摩屋五一自筆の『式亭雑記』抄録写本（以下慶大本『式亭雑記』）の書き込みとの比較にとどまり、書き込みの具体的な考察は行っていない。そこで今回は、『式亭雑記』並びに三馬著作の『浮世風呂』、『浮世床』を資料として五一の書き込みの内容を検討することにした。

子 靖 崎 長

## 二 達摩屋五一に関して

『式亭雑記』の書き込みの検討に入る前に、達摩屋五一に  
関し簡単に述べておく。

達摩屋五一（文政十四―慶応四年（一八一七―一六八））は、  
は近世後期の書肆である。養子とした岩本左七とともに『燕  
石十種』を編纂した人物として名高い。特に本書に所収され  
る『戯作者小伝』や岩本活東子著の『戯作六家撰』等は、近  
世文学の中で、たびたび引用される資料である。また、五一

が扱う書に対する評価は高く、幕末にイギリスから通訳官と  
して訪日したアーネスト・サトウが、五一の捺印がある書を  
数多く購入していたことはよく知られるところである。

今回取り上げた『式亭雑記』も五一が所蔵していた書の一  
つである（五一の捺印はないが、随所に五一の書き込みが見  
られるところから所蔵されていたものと考えられる）。五一  
は自らも『式亭雑記』の抄録を行っており、（慶大本『式亭  
雑記』）、その中にも同様の書き込みが見られる。

五一の孫岩本米太郎によると、五一は式亭三馬を崇拜し  
ていたという。岩本米太郎の「明治初年の古本屋」『本屋の  
話 日本書誌学大系16』（一九七一年 青裳堂書店）の中では  
祖父はかねてから崇拜してゐる人があります、それは何  
人かと云ふと、戯作者の式亭三馬でございます。ご承知  
の通り、三馬は本町に江戸の水を賣弘めます前、江戸の  
四日市で本屋をして居りました。

六六頁

と述べている。記述に見る「江戸の四日市」は五一が本屋を  
開業した場所であり、五一の蔵書印には「江戸四日市古今珍  
書僧達摩屋五一」印も見られる。稿者は現在、蔵書印を頼り  
に五一所蔵の書の調査を行っているが、その中には三馬の著  
作や三馬の蔵書印が押された書も見られ、五一が三馬に傾倒  
していた様子が窺われる。五一が『式亭雑記』を所蔵してい

たのは、このような三馬に対する並々ならぬ思いがあったか  
らと考えられる。

### 三 『式亭雑記』の書き込み

『式亭雑記』の達摩屋五一の書き込みは以下の通りである。  
いずれも朱墨で書き込まれている。実際の書き込みは拙著  
(二〇一六)の口絵に収録されているので参照されたい。尚、  
書き込みの番号は拙著(二〇一六)に従う。

- ① 一一丁ウ 彼のうら多りを
  - 「ㄥ」に訂正の朱点、右脇に「え」<sup>(5)</sup>
  - ② 一三丁ウ 借贖多し
  - 「贖」に訂正の朱点、その右脇に「贖ノ誤字ナルベシ」<sup>サイ</sup>
  - ③ 一九丁オ いそかすはぬれましものと<sup>オヒメ</sup>
  - 「と」の右脇に朱で「をカ」左脇に朱で小丸。
  - 図の上部に朱で「活東子云かな違といふは却て非也虹も二  
ジ也」
  - ④ 七六丁オ ○米二両を(図一三一)に訂正の朱点、そ  
の右脇に朱で「黏」<sup>もち</sup>
- ※慶大本『式亭雑記』では、「黏敷 糲ノ方正字ナリ」と  
記されている。
- ⑥ 九五丁ウ 三丁目家主茂兵衛の左脇に朱で「三馬父ナルベ

シ」(図一五一)

※慶大本『式亭雑記』では「三丁目家主茂兵衛の左脇に朱  
で「菊池茂兵衛ト云板木師ナリ 三馬父ナルベシ」(五七  
丁ウ)と記されている。なお拙著(二〇一六)では、こ  
の他に⑤として七八丁裏の四月廿九日曇の下「昼刻より  
雨夕方晴」(朱)の書き込みを入れているが、これはそ  
の内容や筆跡から三馬の書き込みと考えられる。

この中で、本稿では①の「ㄥ↓え」の書き込みを取りあげ  
る。①の書き込みは単に「ㄥ↓え」の訂正だけであり、五一  
がどのような意図で訂正をしたかは書かれていない。五一の  
他の書き込みを見ると、③では、三馬が談洲樓焉馬の「いそ  
がすはぬれましものと夕立の跡よりはるゝ堪忍のにし」とい  
う歌の「にし」に「堪忍の二字(ニシ)虹(ニチ)とチシの  
かな違也」というコメントを記したのに対し、五一が「活東  
子云かな違といふは却て非なり虹もニジ也(朱)」と訂正を  
記している。また④に関しては、『式亭雑記』では「黏」<sup>もち</sup>と  
しか記されていないが、慶大本『式亭雑記』では「黏敷 糲  
ノ方正字ナリ」というコメントが見られる。このように、  
五一の書き込みは仮名遣や漢字の訂正など、表記に対する関  
心が窺われる。では、五一はどのような意図をもって「ㄥ」  
を「え」と訂正したのだろうか。この点を『式亭雑記』の「ㄥ」  
の表記から観察していく。

#### 四 『式亭雜記』に見る「ゑ」の表記

さて、①の「ゑ↓え」は自筆本一二丁ウの「風俗」の中に見られる訂正である。「風俗」の内容は以下の通りである（以降傍線は稿者による。／は改行部分）。

女のなりかたち、鬢をいよ／＼／小さくしてむかしにかへりし体なり／夏衣裳は白地のゆかた／黒縹子の帯一面の流／行なり はでやかなる女は／白地の浴衣に紅絹或いは緋／縮緬の裏襟をかけて／彼うらゑりをわざとうらかへり／たる体に引返して着る／事多くあり／夏冬ともに女の衣装に／伊予染流行並に鹿子流行／路考茶流行／女の髪のの風京大坂のかたちになれり号てぐるりおとしとか云へり、

一二丁ウー一二丁オ

『式亭雜記』の中で、「ゑ」の表記が使用されているのは、この「風俗」の「うらゑり」（一一ウ）の「ゑり」（「襟」「衿」の意味、以降「エリ」で表記する）ほか、「エ、」（二七オ、二七ウ）、「うゑそめて」（五〇オ）、「中の綱をエ」（五一ウ）、「稗史（ゑさうし）」（五五ウ）、「ゑらうする」（七八オ）、「酔（エヒ）」（七八ウ）、「のゑ」（八一オ、八三オ）、「さかゑや」（八四ウ）、「ゑびら」（八八オ）であるが、他の箇所には訂正は見られず（慶大本『式亭雜記』は抄録写本のため、「のゑ」

「さかゑや」「ゑびら」の部分は書写されていない）、慶大本『式亭雜記』でも「ゑ」で表記されている。従って「ゑ」から「え」へ訂正は「エリ」という語のみである。

次に江戸時代に「エリ」がどのように表記されていたかを国立国語研究所の歴史コーパス中納言（以下CHI）他を利用して観察することにする。

#### 五 「エリ」の表記

##### 五―「エリ」という語の発生時期

「エリ」は古くは「ころものくび」「きぬのくび」と呼ばれていた（『日本国語大辞典』第二版 二〇〇一による）。

『大和物語』（一六八 苔の衣）には「大徳のすむ所に来て、物語りものごとなどしてうちやすみたりけるに、衣きぬのくびに書きつけける」という例が見られる（CHI調査による 『新編古典文学全集12』 四一頁）。「エリ」は、『梁塵秘抄』（治承年間（一一八〇年前後）に「此のごろみやこにはやるもの、肩当腰当烏帽子とどめ、ゑりの豎（たつ）かた、さび烏帽子」（『日本国語大辞典』第二版による）の例があり、平安後期には「エリ」という言葉があったことがわかる。ただし、表記に関しては『梁塵秘抄』の底本が江戸時代の写本（天理図書館蔵竹柏園旧蔵本 現存唯一の伝本 以下天理本）しか残されていない

ないため、成立時の表記に関しては明らかではない。

この天理本を底本とした『梁塵秘抄 閑吟集 狂言歌謡 新日本古典文学大系56』（一九九三 岩波書店）所収の小林芳規編「梁塵秘抄」口頭語集覧」の中では、「語頭におけるエとエ」として次のようにある（傍線は稿者による）。

語頭におけるエとエ

ゑり（襟）の堅つ型たかな 368

ゑせかづら（似而非鬘） 369

「えり」「えせ」ともに院政期の仮名遣を知る例が見られないが、院政末鎌倉初期の和泉往来文治元年（一一八六）写本や中山法華経寺蔵三教指帰注に、

一 弓胡カキヤナク 籙エヒラ 簞エヒラ（和泉往来、二月）

シキテ酒をノマセテエハス（三教指帰注二六〇五）

此ヲ食イテエイ（酔）クルイス（同ウ二八〇七）

とあり、これらの文献が口頭語を反映していることからすれば、口頭語では梁塵秘抄撰述の時にエとエの乱れが語頭にも及んでいたと考えられる。鎌倉中後期は、消息や古文書にこの現象を屢々拾うことが出来、エとエが同一音になっていたことを示している。

四四二頁

この記述からは平安末期には「エ」と「エ」の音が混乱し、表記に誤りが生じる可能性があったことが知られる。また、

傍線部の「えり」「えせ」ともに院政期の仮名遣を知る例が見られない」という記述があり、「エリ」が元々「ゑり」であったか「えり」であったかは明らかではない。

### 五二二 三馬著作の「エリ」の表記

ここからは、江戸時代の「エリ」の表記を見ていくことにする。屋名池誠（二〇一一）は、江戸時代の表記システムを「表記という伝達ルートは複数あっても、一つのヨミというゴールに確実に到達でき、伝達の一意性が確保されている（二六八頁）」という、多（表記）対一（語形）の「多表記性表記システム」であると述べている。そして、その異表記の範囲は無限定ではなく、ある一定の秩序を持った表記システムであるとし、これを「近世通行仮名表記」と名付けた。

今回取り上げた「エリ」の表記に関しても、屋名池（二〇一一）の中で『浮世風呂』（前編上）を取りあげ、「ゑり」と「えり」の複数の表記があることを示している。おそらくは他の江戸の著作の調査でも同様の結果が得られると思われるが、ひとまず、江戸時代の「ゑり」と「えり」の表記がどのような状況であったか見ていくことにする。最初に屋名池（二〇一一）でも取り上げられている式亭三馬の著作『浮世風呂』と、『浮世床』の「エリ」を観察する。

『浮世風呂』の中で「エリ」は全体で九例見られる。その

中には「ゑり」の表記が七例（すべて振り仮名）、「えり」の

表記が二例（振り仮名一例）ある。以下に用例をあげる（用例の採取に関しては、日本古典文学大系本『浮世風呂』を使用。天理図書館所蔵『浮世風呂』版本で確認）

01 下女 ● 鮮物をするとき襟かたを引裂た事

02 子もり 跡で、わつちの襟を剃っておくれナ

03 うば ヘン。あきれらア。襟や顔をすりつけるよりは

04 半襟は白粉染ツて

05 おいへ 緋縮緬の襦袢に白襦子の半襟で

06 おかべ やつぱり白えりをかけて

07 おいへ 生際の白粉と、襟の白粉とは

08 襟かたから胸いちめん汁のか、つた古跡べつたり

09 綿頭巾は、血氣盛の丈夫が、襟へ巻たり

『浮世床』の「ゑり」は四例あり、いずれも「ゑり」（すべて振り仮名）の表記である（『日本古典全集』早稲田大学図書

館所蔵『浮世床』版本で確認）。

10 でん 無なしの襟足を剃刀で剃込で拵へたぜ。

11 びん あれよりは坊主襟で能から木地の儘でおけば能い事よ

（初編上）

12 土龍 その手で襟をちよいと合せてえて

13 土龍 襟先をぐつと引張て

（二編下）

『浮世風呂』『浮世床』の中では大勢が「ゑり」の表記であるが、「えり」の例も二例見られる。02は子守の女性が乳母に自分の襟足をそってほしいといったのに対し03の乳母が、「ヘン。あきれらア。襟や顔をすりつけるよりは、小鬢先の兀ツちやうでも治すが能」と憎まれ口をたたいている場面である。

乳母の発言には「ゑり」の表記が使用されている。子守と乳母は同じ奉公先で働いており、階層もさほど変わらない。違いは子守が十三四、乳母が三十四五という年齢差のみである。

もう一例は05く07は二十三四くらいの女性が同年代と思われる女性に流行の着物について話している場面に見られる。

「白えり」と「えり」を使っているのは「おかべ」という女性、「半襟」「襟」と「ゑり」を使っているのは「おいへ」、である。

二人の間に特に階層差はなく、「えり」が振り仮名ではなく、また「白」に続く使用されているという点が「おいへ」の使用と異なる点である。

以上、三馬の著作の「ゑり」と「えり」という異なる表記に関しては、特に表記上の意図は見いだせなかった。

五―三 江戸時代の他資料の「エリ」の調査

次に、江戸時代の他資料から「エリ」の表記を観察する。調査は〔CH〕江戸時代編を用いた（調査した用例は〔CH〕に提示された底本で確認した）。調査した資料には「ゑり」「えり」と、振り仮名で「襟」「襟」「衿」「衿」の種類が見られた。また「エリ」は語頭に出現する場合と語中に出現する場合があったので、これを区別し、『浮世風呂』『浮世床』の用例とともに表1に示した。次に用例を抜粋して示す。

14 南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏を力にて、襟引き寄せて

（『心中刃は氷の朔日』 一七〇九）

15 正月のきりこみいしやうにかのこのゑりかけたらみなしろぬめがよいとおつしやる

（『陽台遺編・姪閣秘言』 一七五八）

16 ソンナラはだ身をはなさぬといひなんすがゑりにかけていひなんすか

（『郭中奇譚』 一七六九）

17 爰へ手を。やつて。ゑりの所の。あかない様にして。おくんねんし

（『南閩雑話』 一七七三）

18 羽織のゑりがおれんせん。お待なんし

（『通言総籙』 一七八七）

19 肩をコウいからしてゑりをトいらふが妙におかしふことさり升

（『北華通情』 一七九四）

20 半合羽びろうどの三寸ゑりて拭かたに引かけた廿四五なおとこが

（『嘘之川』 一八〇四）

21 露はさいぜんより何かしあんありがほに襟に顔をさし入ていたりけるが

（『竊潜妻』 一八〇七）

22 あなたもしお羽折のえりがト直すふりして

（『誰が面影上巻其二』 一八一二）

23 緋ぢりめんにびろふどゑりのぢばん。郡内じまの下着。八丈じまの上着。

（『箱まくら巻之上』 一八二二）

24 小三は金五郎のうしろよりきもののゑりをなほしながら

（『仮名文章娘節用三編上』 一八三四）

25 お吉も立て階子の傍。よびとめて衿に手をかけ。耳に口よせ小声になり

（『花廻志満台 初編卷之下』 一八三六）

26 言まぎらして横の襟。ひき冠りツ、寝反りし。

（『春色連理の梅 初編卷之一』 一八五一）

27 肌着の襟へ腮半埋ませてしはし黙然して居たりし時

（『春色江戸紫二編上巻』 一八六四）

表1 歴史コーパス中納言(III) 江戸時代編他の調査による「エリ」の表記

著作(年代)	えり		襟(えり)		えり		襟(えり)		えり	
	語頭	語中	語頭	語中	語頭	語中	語頭	語中	語頭	語中
心中刃は氷の朔日(一七〇九)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
心中天の網島(一七二〇)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
陽台遺編(一七五八)	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
郭中奇譚(一七六九)	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
南閩雑話(一七七三)	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
甲斐新話(一七七五)	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
通言総籙(一七八七)	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
仕掛文庫(一七九三)	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0
北華通情(一七九四)	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
嘘之川(一八〇四)	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0
竊潜妻(一八〇七)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
浮世風呂(一八〇九―一三)	0	0	5	2	0	0	0	0	1	1
誰が面影(一八二二)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
浮世床(一八一三―一四)	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0
箱まくら(一八二二)	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0
明烏後の正夢(一八一九―)	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0
仮名文章娘節用(一八三一―三五)	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
恋の花染(一八三二―三三)	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0
春色梅児誉美(一九八二―三三)	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0
春色辰巳園(一八三三―三五)	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
花廻志満台(一八三六)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
春色連理の梅(一八五二)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
春色江戸紫(一八六四)	0	0	2	0	0	0	3	2	0	0
計	19	3	14	3	6	0	1	1	4	0

「エリ」は、『CH』の調査と『浮世風呂』『浮世床』を含め、五十二例採取された。「ゑり」（振り仮名を含む）の表記が四十五例、「えり」（振り仮名を含む）が七例である。「えり」の表記は、『浮世風呂』二例の他、近松の浄瑠璃本二例、上方の洒落本『誰が面影』一例、松亭金水の『花廻志満台』一例、山々亭有人の『春色江戸紫』一例見られた。但し、松亭金水の『恋の花染』では「ゑ」が使用されており、また山々亭有人の『春色恋廻染分解』では「襟髪」という「ゑ」の表記を確認しているので、著作者による表記の差ではない。版本であるため、筆耕の違いによるのかもしれない。全体としては「ゑり」が大勢を占め、「えり」と「ゑり」の違いには、地の文と会話文という違いも、会話者の階層の違いや男女差、また、語頭か語中かによる違いも特に認められなかった。ひとつあげるとすれば、近松の浄瑠璃集やまた上方系の洒落本に「えり」の表記があり、出版地域の違いが考えられる。しかし、用例が少ないためこの点はさらに拡大した調査をする必要がある。

契沖の『和字正濫鈔』（元禄六（一六九三）年 『契沖全集』第十卷 一九七三 岩波書店から引用）の中には  
領 えり 假名未考、俗語坎、物には衣くひといへり

とある。「エリ」は、楫取魚彦の『古言梯』（明和五（一七六八）

にも語が収録されておらず、廻った行阿の『假名文字遣』（貞治二（一三六三）年以降の成立とされる）にも語例の記載がない。また、先にあげた小林（一九九三）に「えり」「えせ」ともに院政期の仮名遣を知る例が見られない」とあり、現在のところ古い資料における用例も定かでない。江戸時代の表記は、屋名池（二〇一一）のいう「多表記性システム」であったため、「エリ」には「ゑ」と「え」の使用が通行していたというのには頷けるが、「ゑり」の方に偏りがあるのはなぜかという点に関しては現在のところ定かではない。

## 六 三馬の「エリ」以外の「ゑ」

### 六一 『式亭雑記』に見る「エリ」以外の「ゑ」

ここでは、『式亭雑記』の「エリ」以外の「ゑ」の表記を見ていくことにする。先に示したように、『式亭雑記』の中で、「ゑ」の表記が使用されているのは、「うらゑり」のほか、「エ、」（二七オ、二七ウ）、「うゑそめて」（五〇オ）、「エ」（五一ウ）、「稗史（ゑさうし）」（五五ウ）、「ゑらうする」（七八オ）、「酔（エヒ）」（七八ウ）、「のゑ」（八一オ、八三オ）、「さかゑや」（八四ウ）、「ゑびら」（八八オ）である（「のゑ」は遊女屋の主人の名前、「さかゑや」は遊女屋の屋号、「ゑびら」は遊女の名前）。この中で、契沖の『和字正濫鈔』には、

「繪 ㄹ」「醉ふ ㄹふ」「殖 うㄹ」が見られる（『契沖全集』第十卷 一九七三 岩波書店から引用）。

繪 ㄹ 胡檜切。此呉音をもて和名とせり（二〇九頁）

醉 ㄹふ 古事記等（二二〇頁）

殖 うㄹ 日本紀、古事記、万葉、和名等一同なり。万葉十五に、字字留ウツルといへり。ㄹとうと、わの下にて五音通せり。うへともうふともかくは誤れり（二二二頁）

尚、『和字正濫鈔』に語例が見られる「え」の表記が、『式亭雜記』に二例見られる。「松の下枝しつゑ（五一オ）」「さえわたる声音（七一オ）」である。

枝 えた（二〇三頁）

長 五 さえ さゆ。天武紀に、潔を常にはいさきよしとよむを書く點し、万葉には清の字をさやとよめり。さゆるも清くなる心なり（二〇七頁）

「殖（植）」は『假名文字遣』（『假名文字遣』汲古書院一九八〇 東京大学国語研究室蔵（文明十一年本）、国立国会図書館蔵（慶長板）の影印所収を使用）では「うふる 殖 栽」「うへをく 殖栽」とあり、ハ行転呼として扱われているが、契沖はこれを誤りとしている。

六一二 三馬の著作その他に見る「エリ」以外の「ㄹ」

次に三馬著作と、CHJの調査から「エリ」以外の「ㄹ」の表記を観察する。ここでは『式亭雜記』に見られた「繪ㄹ」「植ㄹ」「醉ㄹ」を取りあげる。

「繪」に関しては、『浮世風呂』で十六例あり、いずれも「ㄹ」の表記、CHJの調査では『近松浄瑠璃集』『心中二枚絵草紙』に一例「え」の表記があったほかはすべて「ㄹ」の表記であった。「植ㄹ」に関しては、『浮世風呂』では「活字本」「植つけ」「浮世床」では「鉢植はちうゑ」といずれも契沖の『和字正濫鈔』に倣った「ㄹ」の表記となっている。CHJの江戸時代編で採られた用例は三例のみで、「植ㄹ」が一例（『春色辰巳園』、「植へ」が二例（『恋の花染』『春色江戸紫』）である。「醉ㄹ」に関しては、『浮世風呂』では「ㄹふ」が二例、また、「よふ」が十三例（酔醒（よいざめ）含む）であった。また、CHJの調査でも「ㄹふ」より「よふ」という表音式仮名遣いの方が多く使用されていた。屋名池（二〇一一）では、江戸時代の表記が多表記性表記システムであるとともに「正確にヨミを伝えていた立派な表音表記（二五三頁）」と述べているが、それを示す例であろう。三馬自身も『浮世風呂』三編自序のあとに「假字例」として「○申を「もうす」訓興立を「こうりう」音と書る類すべて婦女子の讀易きを要とすれば音訓ともに仮字つかひを正さず」と、著作における読み易さを重視

した考え方を示している。<sup>(10)</sup>

## 七 三馬の「ゑ」と「え」の使い分け

最後に、三馬の著作の中で「ゑ」と「え」の表記が意図されて使い分けられている例を一つ上げておく。それは、『小野愚謔字尽』（文化3（一八〇六））所収の「かまど詞大概」<sup>(11)</sup>の中に見られる。「かまど大概」は片言資料の一つである。「かまど詞大概」に関しては拙稿（二〇一三）で、『浮世風呂』に見る「かまど詞大概」の語彙（以下「かまど詞」とする）を使用する階層や使用場面等の調査を行い、「かまど詞」を話す人物は、江戸の一般庶民の中でも、特に中下層の仲間内の会話に多く使用されていることを明らかにした。

鈴木真喜男（一九七四）（『日本庶民文化史料集 第九巻 遊び』所収『小野愚謔字尽』の解題）では、この「かまど詞大概」に関し、

「かまど詞大概」は、大万宝にもみられる「諸人片言なをし」などの類である。「片言なをし」は、安原貞室の『片言』の末書であり、「当世大和言葉」などともよばれ、重宝記の類にもおさめられている。「けたいな詞つきじやなア。お慮外も、おりよげへ。観音様も、かんのんさま。なんのこつちやるな。」のように、「かみがたすじの

女」に江戸言葉をけなさせている、有名な条とみあわすと興味深いものがある。

## 四三五頁

と述べているが、「かまど詞」はこの記述の中にある「江戸言葉」の訛をさらにきつくした言葉と考えられる。

「かまど詞」の中には「夷をゑべす」という項がある。当時の標準的な「夷」という言い方に対し、片言として「ゑべす」を当てたもので、「夷」の「え」に対し、「ゑ」の表記が使用されている（『和字正濫鈔』では「夷 えひす（二〇五頁）」と「え」の表記である。<sup>(12)</sup>『浮世風呂』の中では、この「夷をゑべす」を利用した場面が見られる。

まず、「えびす」の例として「夷講」の二例がある。この場面は、松右エ門と八兵衛という人物が、落ちぶれた地主の息子の噂話をしているところである。

松 鯉節かつおぶしのはいる汁あつけは夷講えびすじょうと生辰たんじりばかり  
八 まつ酒さけは夷講えびすじょうばかり

（前編巻之上）

息子の父親は利勘で、鯉節の入る汁物や酒は夷講などの特別なお祝いの日でしかふるまわないと話している。二人の言葉遣いにはほとんど音訛が見られず、また、「私」や「おまへがた」などの人称代名詞やお互いに文末に「〜ます」を使用する場合もある。両者の職業や階層は明らかでないが、言葉

遣いから考え、中上層に属する人物と思われる。<sup>(13)</sup>

一方「ゑべす」の例には「蛭子講」の一例が見られる。これは、「ばち」という芸者が同業の芸者「さみ」と会話している場面で使用されている。

ばち わたしは蛭子講の坐敷さ。丁度八ツに歸つたはな

(二編卷之上)

「ばち」は、話し相手の「さみ」に対し「おめへ」や「けへる」「弱虫じやアねへはな」などの音訛が見られる。小松寿雄(一九八七)では、二人称「おめへ」の相互使用するの「女人筋と下層の女性に多いと言える 四〇七頁」と述べている。「ばち」は芸者で小松の言う女人筋にあたり、「さみ」に対する二人称は下層と同じ「おめへ」を使用している。

このように、『浮世風呂』の「えびす」と「ゑべす」の使用者を比較すると、階層や職業に違いがみられることがわかる。もちろんこれは「えびす」の「え」に対し、「ゑ」が片言の発音を示す表記(三馬がどのような音をイメージしていたかは不明である)をマークしていたということであり、三馬が著作の中で、すべての「ゑ」を片言の発音として表記していたということにはあたらぬ。しかし、三馬の著作に「ゑ」と「え」の表記で音の違いを表す例があったことは、興味深い。

「ゑ」と「え」のに関しては、十三世紀には[je]の音に合一

され、それが近世には[e]の音になったとされる。とすれば、三馬の時代には「ゑ」と「え」は同一の音になっていたはずである。そう考えると、三馬は実際の音とは関係なく、二つの表記を人物描写に利用していたということになる。これは、特殊表記と共に三馬の表記上の工夫といえよう。

### おわりに

本稿では、『式亭雑記』に見る達摩屋五一の書き込みを糸口に三馬の「ゑ」の表記について観察した。三馬自筆の資料からは、ほぼ『和字正濫鈔』に沿った表記姿勢が見られる。一方、著作に関しては「酔(よ)ふ」の用例が多いことから、「酔ふ」に関しては、表音表記が主流だったことが窺われる。また三馬の著作には、人物描写を意図した表現効果としての「ゑ」と「え」の書き分けもみられる。このような表現効果による表記も含め、三馬著作の表記に関してはさらに検討する余地が残されていると考える。

著作とは異なる三馬の私的文章(『式亭雑記』や識語等)に関しては、今後仮名遣いに関する調査分析を行い、三馬の私的な表記が、何に範を求めていたかについて考えていきたいと思う。

(教授 日本語学)

## 注

- (1) 「慶應義塾図書館所蔵『式亭雑記』―翻刻と解説―」(川村学園女子大学研究紀要) 25巻1号 川村学園女子大学図書委員会 『大東急記念文庫所蔵式亭三馬自筆『雑記』影印と翻刻』(二〇一六 武蔵野書院所収)
- (2) 安政四(一八五七)年から文久三年(一八六三)年にかけて刊行された。江戸時代の風俗・人情・奇事異聞に関する稀書珍書(多くは写本)をまとめたもの。
- (3) 岩本活東子は五一の義子岩本佐七とされているが、佐七ではなく五一の可能性が考えられる。
- (4) 慶大本『式亭雑記』は、幸田成友(明治六〇昭和二十九年 一八七三〜一九五四 幸田露伴の弟)が「三馬の机と日記」(『読書人』第5号 一九五二)の中で、三馬の机と共に自ら所蔵したものと記している。
- 幸田は同稿の中で次のように記している。
- 同書の末尾を見ると、「慶應二年丙寅十一月二日、式亭自記(横本一冊)のうちより無用を舍(ステ)て有用を取り、某日のあしたに筆を立てて、ゆふべまでに書をはりぬ
- (※) 江戸價書翁 法斎無物老人識」とある。「法斎無物老人」とは、珍本売買に名高い江戸四日市(現在の中央区日本橋一丁目近辺)の待買堂達磨屋五一のことである。
- (※) の「ぬ」は、引用としてそのままあげているが「つ」の誤りである。この慶大本『式亭雑記』のほか、現在判明している『式亭雑記諸本』は十種ある。詳しくは拙稿(二〇一三)を参照されたい。
- (5) 但し、慶大本『式亭雑記』の「ゑ」の訂正は墨書でなされており、他の書き込みとは質を異にしているかもしれない。
- (6) 歴史コーパス中納言(江戸時代編)の詳細に関しては <https://chunagon.ninjal.ac.jp> を参照されたい。
- (7) 浅川哲也編『春色恋廻染分解 翻刻と総索引』(おうふう 二〇一二)で調査したところ「襟髪(ゑりがみ)」が一例見られた。
- (8) 橋成員の『倭字古今通例全書』(元禄九(一六九六)年)の誤謬を批判した契沖の『和字正濫通妨抄』(元禄十(一六九七)年)では、次のように記されている。
- うふる 植 今云、宇々、宇恵なり、うはるといふは俗語、引ける哥もうゝる菊なり、花にはあらず
- (9) 今回は『式亭雑記』に見られる「エリ」以外の「ゑ」の表記のみを、『浮世風呂』『浮世床』とCH『江戸時代編』から採取したが、「ゑ」の表記例はほかにも見られる。三原裕子(二〇一九)『江戸語資料としての後期咄本の研究』「第6章/をを表す仮名遣いと作家の位相の違い」では、「e/をを表す仮名の使用状況」として『浮世風呂』の「こゑ」「ゑん」の例をあげ、「混用例として「声」の振仮名に「こへ」「こゑ」が現れる。振り仮名の語頭でも、「縁」に「えん」と「ゑん」の二通りの仮名遣いが行われている」とする。『浮世風呂』では「ゑ」がハ行点呼音の「へ」の表記とも混用されていたことが知られる。
- (10) 但し、『浮世風呂』三編では他編と同様に「まうす」のままになっている。注9であげた三原(二〇一九)では、この三編自序の記述を取りあげ、「三馬は「申(まをす)」を『浮世風呂』三編の自序では「もうす」としたが、実際には「まうす」としている。これからは三馬が婦女子の「読み易さ」を図って、歴史的仮名遣いを書き改めようとしたが、いまだ従来の仮名遣いに捉われてできなかった(一五五頁)」とし、三馬が記述した

「もふす」の仮名遣いが反映されていなかったことを示している。

(11) 「かまど詞」はその前書きに「おかしくはおかまのまへの八介どの長松とひとつになつてかたことだらけの高ばなしこれは大和詞のこぢつけながら」とあり、「大和詞」をもじつて名付けられたものであることが知られる。

(12) 『仮名文字遣』でも「えひす」と「え」の表記である。

(13) 小松寿雄（一九九九）では、松右エ門と八兵衛共に階層不明としている。

(14) 「エ」の音に関しては、キリシタン資料や中世末期の中国語資料、近世前期の朝鮮語資料等から研究され、変化の時期に関しては異論もある。

(15) 三馬は通常とは異なる濁点「白濁」<sup>（白濁）</sup>や、カ行、サ行、タ行に半濁音符を付す表記を用いて、片言の表現に利用している。坂梨隆三（一九七五）「三馬の白濁」『岡山大学法文学部紀要』第三十六号（『近世の語彙表記』二〇〇四 武蔵野書院所収）棚橋正博（一九九四）「式亭三馬―会話を精細に描く作家―」『国文学 解釈と鑑賞』59―8、長崎靖子「式亭三馬の半濁音符に関する一考察」『近代語研究』第十五集等を参照されたい。

参考文献

- 岩本米太郎（一九七一）「明治初年の古本屋」『本屋の話 日本書誌学大系16』 青裳堂書店
- 小林芳規（一九九三）『梁塵秘抄』口頭語集覧』『梁塵秘抄 閑吟集 狂言歌謡 新日本古典文学大系56』
- 小松寿雄（一九八七）「浮世風呂における女性の人称と階層」『近代語研究』七集 武蔵野書院

小松寿雄（一九九九）「浮世風呂における人称の階層差と男女差」『近代語研究』第十集 武蔵野書院

鈴木真喜男（一九七四）『小野愚謙字尽』解題 『日本庶民文化史料 集成 第九巻 遊び』所収

三原裕子（二〇一九）『江戸語資料としての後期咄本の研究』ひつじ書房

長崎靖子（二〇二二）「式亭三馬の片言描写―「かまど詞大概」を資料として―」『近代語研究』第十六集

長崎靖子（二〇二三）『式亭雑記』諸本に関して―八種の抄録写本の比較から―』『近代語研究』第十七週（『大東急記念文庫所蔵式亭三馬自筆「雑記」影印と翻刻』武蔵野書院 二〇一六所収）

長崎靖子（二〇一九）「式亭三馬の仮名文字遣い―『式亭雑記』の仮名文字調査から―」『会誌』第36号 日本女子大学大学院の会

調査資料

- 『式亭雑記』『大東急記念文庫所蔵式亭三馬自筆「雑記」影印と翻刻』長崎靖子編 二〇一六 武蔵野書院
- 『浮世風呂』『日本古典文学大系63 浮世風呂』一九五七 岩波書店（天理図書館所蔵『浮世風呂』版本で確認）
- 『浮世床』『新潮日本古典集成 浮世床 四十八癖』一九八二 新潮社（早稲田大学図書館所蔵『浮世床』版本で確認）
- 『小野愚謙字尽』太平主人編『小野愚謙字尽』一九九三 太平書屋
- 歴史言語コーパス中納言（江戸時代編） 国立国語研究所編  
<https://chunagon.ninjal.ac.jp> 参照